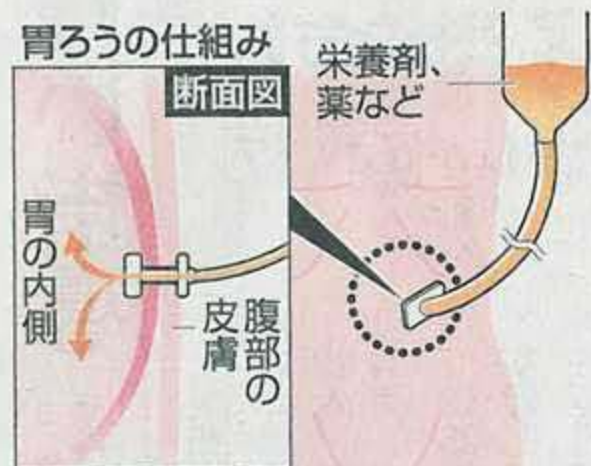


胃ろう 長短所見極めて

口から食べられなくなったとき



胃ろうは、口から食べられなくなったとき、おなかの穴を開け、管から胃に栄養や水分を入れる方法だ。図。「ろう(瘻)」とは、「本来ないところに道ができる」という意味だという。元々は、障害があっても口から食べられない子ども向けに開発された。

人工的に栄養を補う方法には、大きく①管で胃や腸に栄養を送る「経管栄養法」②首などの静脈や手足の細い血管に点滴する「静脈栄養法」がある。①の中

患者 不快感少なく

胃ろうは、介護保険が導入された2000年前後から、食事がとれない高齢者らに急速に広がった。毎年10万人前後が新たに作り、現在40万〜50万人が利用していると推定されている。だが数年前、安易に胃ろうをつけることに批判が高まった。長所と短所を見極め、家族で話し合っって判断することが必要だ。



に、胃ろうと、鼻から管を入れる方法などがある。胃ろうは、ほかの方法に比べ、患者の不快感が少なく長期使用しやすい。メリットとしては、「口から食べるリハビリをしやすい」「家族が食事介助する時間を減らせる」「栄養状態が改善し、床ずれが治る」などが挙げられる。一方デメリットとしては、「口を使う機会が減る」「介護施設では入居制限がある」「一度開始すると、やめにくい」などがある。

手術は20分程度で済む。管は1カ月〜半年に一度、交換が必要だ。栄養剤には「医薬品扱い」と「食品扱い」がある。医薬品扱いだと医療保険がきくが、食品扱いは全額自己負担。医薬品扱いのものを中心に使えば、1割負担で月1万円以内に収まるという。

安易につくる例も

一気に広がった胃ろうだったが、「平穩死」「自然死」という言葉が広まるようになった数年前から、風当たりが強くなってきた。本来は、口から食べるまでの一時的な手段のはずだったが、老衰で死期が迫っている患者に、安易につくるケースなどが明らかになってきたためだ。



①胃ろうを使い、夫に夕食前の水を入れる妻。水分が多めに必要なので、食事以外に1日3回に分けて注入するという
②胃ろうのチューブを交換する医師。1カ月〜半年ごとに交換が必要だという。いずれも横浜市神奈川区

補完的に使う選択肢

批判の高まりもあり、ここ数年、胃ろうを選択する患者・家族は減ってきているようだ。

朝日新聞横浜総局が横浜内科学会と共同で昨年11月に実施した「在宅医療と看取り」アンケートでは、胃ろうをつけない選択が増加傾向にあることがわかる。「過去10年間ほどで、家族が胃ろうをつけない選択をするケースは増えているか」と尋ねた。回答した診療所・病院40カ所のうち、「増えている」が14カ所(35%)で最も多かった。「変わらない」12カ所(30%)、「減っている」3カ所(7.5%)、「わからない」11カ所(27.5%)だった。

具体的な事例についても尋ねた。「家族と十分話し合っ、胃ろう造設を病院に依頼したが、担当医が胃ろうに批判的で、ほぼ追い返されてしまった」「南区のクリニック」という回答の一方で、「家族に愛されている

また、日本老年医学会は12年、胃ろうを含む人工栄養法について、患者の人生に有益でないと判断される場合には、差し控えや中止も選択肢とする指針をまとめている。

一方、ベテランの医師ですら、将来口から食べられるかどうか、回復の予測は難しいという。胃ろうに詳しい赤羽重樹・西神奈川ヘルスケアクリニック院長によると、つくるかどうか決める時点で、大まかにいえば「確実に回復する」「回復はまず無理」とはっきりわかる患者は各1割、残り8割は「どちらになるかわからない」のだという。

場合は、家族が胃ろうの管理を喜んでしていることが多い(神奈川県神奈川区的クリニック)というものがあつた。

胃ろうに詳しいクローバーホスピタル(藤沢市)消化器科の望月弘彦医師(53)によると、最近「胃ろうはやめてほしい」という患者・家族が増えている。だからか1人を胃ろうにして看取るか、2人目のときに拒否するケースが目立つという。

こうした流れに対し、赤羽医師は、冷静な判断を呼びかける。「たとえやせてしまったお年寄りでも、胃ろうにして栄養補給することで、のみ込みに関わる筋肉がついて、2年後に食べられるようになった、という例もある。完全に口から食べられるようにならなくても、胃ろうを補完的に使う選択肢もある。メリットとデメリットを家族で十分に話し合い、介護力などを勘案し、決めてほしい」

夫婦の時間 取り戻せた

「もう一回」となればやりません

迫る2025 シヨツク

1

7部 胃ろうの選択

「パパ」。妻の呼びかけに、もう反応はなかった。昨年4月28日の夕方、横浜市で在宅介護を受けていた大垣進さん（享年82）は、天国に旅立った。妻の佐智子さん（78）や息子らに見守られ、穏やかな最期だった。進さんは2002年か

ら、脳梗塞などで入院を繰り返した。左半身の麻痺が残った。08年2月から、開業医の赤羽重樹医師（52）の訪問診療を受けていた。09年6月、肺に食べ物や唾液などが入って起きる「誤嚥性肺炎」を起こし、市内の病院に入院した。

退院を前に、佐智子さんは病院の主治医から告げられた。「このままだと肺炎を繰り返して大変です。在宅に戻るなら（おなかに穴を開け、胃に直接栄養を入れる）胃ろうにした方がいいと思います」

で（逝かせて）もいいんだよ」と言われていた。約7年間、佐智子さんの介護を見てきた大西さんの目には、「もう十分やった」と映っていたからだ。

当初、佐智子さんは「胃ろうはやめよう」という考えに傾いていた。「でもとりあえず赤羽先生に相談しよう」。病院から自宅に帰るその足で、クリニックを訪ねた。「詳しく説明しますので、診療が終わるころにまた来て下さい」と言われた。

最初は否定的

迷いは消えた

「先生、お願いします」。佐智子さんの心から、迷いは消えていた。約2時間がたった。

赤羽医師は、このときのことを振り返って言う。「夫婦関係や経済状況、家の造りなども考え、大垣さんならやれる、と判断しました」



夫の進さんの写真を見ながら、「胃ろうをつけて、一緒にいられる時間ができてよかった」と振り返る大垣佐智子さん（横浜市）

「胃ろう?」。佐智子さんは、言葉は聞いたことがあったが、どんなものかは知らなかった。でも、何となく「終末期の延命治療」というマイナスのイメージがあった。以前、夫に胃ろうをつけた友人が「あんなもの、するもんじゃない」と言っていたからだ。

胃ろうの選択を迫られる少し前、ケアマネジャーで訪問看護師の大西美智子さん（56）からは「自然のまま

夜、再びクリニックを訪れると、赤羽医師は、胃ろうに使うチューブなどの器具を何種類か机の上に置き、使い方や特徴を説明してくれた。管理にかかる手間や栄養剤の値段なども話してくれた。

そして、佐智子さんにこころをかけた。「怖いことは全然ない。もしやるなら、我々医療スタッフが全面的にサポートします」

「団塊の世代」が75歳以上になり、医療・介護の提供体制が追いつかなくなる「2025年問題」について考える企画が続いています。記事に関する感想や、介護・在宅医療などのご体験、ご意見を募集します。「介護職員や看護師の現場での悩み」「うちの自治会では、こんな先進的な取り組みをしている」「近所にこんな元気老人がいる」といった情報や、この企画で採り上げてほしいテーマを募集します。朝日新聞横浜総局「2025年問題取材班」あてに、ご連絡先を明記のうえ、郵送かファクス、メールでお願いします。

（この連載は佐藤陽が担当します）